

佳作

『「すみません」の国』 榎本博明著 (和泉開架 361.4/778//W)

法学部2年 東出駿

私は気が付くと1日の中で何度も「すみません」と言っている。電車の中で人に少しぶつかってしまったり、逆になんかぶつかってきた時にも、自分は悪くないと思っているが口に出してしまう。酷い時には、お礼を言う場面でもつい言ってしまうのだ。もはや「すみません」が口癖になっている。考えてみると、多くの日本人は何かがあると、すぐ「すみません」と言っている。また、「すみません」と言っている人は本当に謝罪の気持ちをこめているのか。そんなことを考えていた時に、ふと本書のタイトルが目についた。

本書は、『1章 蔓延する「すみません」』、『2章 日本語は油断ならない』、『3章 言いたいことは言わない日本』、『4章 いやらしさの裏側』、『5章 空気が国を支配する』、『6章 ホンネに敏感な日本、タテマエ主義の欧米』という構成になっていて、長い章でも30ページほどなので読みやすい。

心理学博士である著者が、日本特有のコミュニケーションの深層構造を心理学の視点から、日本文化の背景を諸外国と比較しつつ、明らかにするのが本書の特徴である。様々な話がある中で、1章で紹介されている以下の話から「諸外国と比べて、なぜ日本人は必要以上に謝っているのだろうか。」という私の疑問が解決した。

『「すみません」という言葉は、相手を思いやり、「場」の雰囲気を保つという重要な役割を担っているのである。』(p.45)

諸外国では非を認めるということは「正しさを競う争い」に負けることを意味する。安易に非を認めると、どこまでも賠償責任を負わされる危険がある。これはアメリカが訴訟大国であることを考えると分かりやすい。それに対して、日本において非を認めるということは、「場」の雰囲気を良くして、事態を無難に収めることであり、真実の追求や責任の糾弾とは切り離されたものなのである。したがって、日本では、諸外国のように白黒ははっきりさせるより、曖昧なまま良好な雰囲気を醸し出すことに力点が置かれている。

自己の視点を絶対視しがちな欧米人などは、お互いに自分だけが正しいと信じ、非はないのだという自己主張をどこまでも続ける。一方、日本文化の大きな特徴が、「共感性が高い」と、「みっともないことを嫌う」とことである。つまり、相手の立場に自分を置き換えて、相手の気持ちに共感できてしまう。そうすると、自分の視点から自己主張を続けるのは大人げなくみっともないという感じがする。それに加えて日本には、「非を認めて謝る潔さをよしとする美学」がある。以上の事情から、日本人はすぐに謝ることになる、と著者は述べている。

読後、自分が「すみません」を頻繁に使っている理由が分かった。もちろん、「すみません」を意味もなく多用するのは良くないが、相手のことを思いやるというのは、人と人が友好的な関係を築いていくのに最も大切なことだと私は考えているので、本書から背中を押してもらえた気がする。